
なのはStS再構成SS「COMBINATION ATTACK!!」

枇紗簾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なのはS t S再構成S S「COMBINATION ATTACK
K!」

【Nコード】

N9420X

【作者名】

枇紗簾

【あらすじ】

機動六課にリンクという男とティオールという女の子が配属される。

リンクはタイミングを合わせるのが上手く、スバルと良い関係。恋愛描写もあるよ！
ティオールは思念操作が上手い。リンクのことをりんにと呼んでいる。

タイトルは主な主人公、リンクの得意とする戦術から。
なのはS t Sのストーリーに沿って、スバルとリンクが最高のコンビネーションを目指していくストーリーです。

最高のコンビネーションを求める物語、始まります。

キャラクター紹介（前書き）

始めまして、びっしょす枇紗簾と申します。
初めてSS書きました。なのはSSでグダグダですがどうかお付き
合いを。

まず始めにキャラクター紹介からです。

キャラクター紹介

なのはS t S再構成SS「COMBINATION ATTACK
!!!」

登場人物

リンク＝ザ＝フォンティナ

本作の主人公その1。近代ベルカ陸戦近接式魔術ランクB+、魔力ランクA-の執務官「志望」だった少年。18歳。

執務官育成学校所属中だった彼に、機動六課を設立した八神はやてが目をつけ半場強引に引き抜き。

彼自身は引き抜かれたことに反論はせず、むしろ憧れのフェイト執務官の仕事を間近で見ることが出来ると知って軽く興奮気味。

本作では試験さえ受けて合格すれば執務官になれるので執務官学校に1年機動六課に留学させてもらうということで話がついている。

名前の通り、幼い頃からタイミングを合わせることが得意で、いまや時空管理局のヴィータ副隊長の突撃にすら合わせることが出来るように。

コンビネーション能力はずば抜けて高い能力を持っている。

彼の専用デバイスはまだないが、執務官が戦闘を行うこともあるので学校で支給されたスバルと同じナックル型のストレージデバイスを使っている。

スバルとは昔から仲のよい友達で、訓練で危険度が低いロストロギアの収集でたまに一緒になり、恐るべきコンビネーションを発揮し

中々の知名度を持っている、仲間や管理局には「2色の閃光」という名前で呼ばれているほどだ。

リンクは執務官志望だったためか、その場にあわせた攻撃コンビネーションを即座に作り出すことが出来る。スバルと同じく近接攻撃しか持ち合わせていないため（後々砲撃を使うようになる予定）基本的にスバルと一緒にウイングロードで突撃する方法になっている。（まだリンクはウイングロードを使えないため、スバルのウイングロードに乗っている）

得意技 コンビネーションアタック・相手の動きに合わせること
友人からはリンの名で呼ばれることが今度多くなるだろう。

ティオール＝ランドルク

本作の主人公その2。近代ミッドチルダ広域砲撃式魔術ランクB、魔力ランクA-の女の子。10歳。

ある次元で勤務中のフェイト・T・ハラウンに助けられ、身寄りのなかったティオールはそのままフェイト・T・ハラウンについてくることに。

テストロッサの教育で、ライトニング部隊として機動六課に加入。主に後方からの援護を得意にしている。

大掛かりな砲撃魔法は使えないが、アクセルシューター、バインドなどの基本魔法のコントロールだけはなのはたちと同じくらいのA+ほどのずば抜けた能力を持っている。しかし機動力等がないので、技術的にはB-ほどに落ち込む。

テストロッサやなのはに育てられたせい、好奇心旺盛で明るい女の子である。それと同時に場の空気を和らげるムードメーカー、な

いしトラブルメーカーでもある。

アクセルシューターを思念誘導し、見えない数キロ先の的にぶつけることが出来るので、広域探索魔法や結界魔法など、補助的な魔法が多く取り揃えられている。

得意技 遠距離からのアクセルシューター 思念制御
なのはたちからはティオと呼ばれている。

こんなオリジナル主人公を迎えて書いて行きたいと思いますので、
よろしく願います。

キャラクター紹介（後書き）

完結できるかなコレ・・・（；、、）

出会い、そして訓練 01（前書き）

てことで実は少し出来てたり。
のんびりと進めていきますね。

出会い、そして訓練 01

なのはS t S再構成S S「COMBINATION ATTACK
!!!」

序章「出会い、そして訓練」

ティアナ「ここが機動六課…」

ティアナが大きな建物のエントランスで眩きをもらした。

スバル「ほら、早く行かないと最初の集合に間に合わないよっ」

ティアナ「遅刻寸前まで家の布団から出てこなかったのあんたじゃない！私は悪くないわ！」

ティアナの軽い拳骨がスバルの後頭部に当てられる。

スバル「いたっ、ティア、ひどいよお…」

ティアナ「泣いてる暇があるなら走りなさい！ホントに遅刻しちゃうわよ！」

スバル「ふえっ、ティア、置いてかないでよぉっ！」

ティアナとスバルはお互いを罵倒しながら、それでも顔には笑顔を浮かべ、笑いながら走っていく。

それをある一室でカメラを使い観察している者がいた。

はやて「ほんまにだいじょうぶやろなあ・・・」

機動六課設立者兼部隊長のはやては心配気に呟いた。

ここが機動六課…ね…

そして、新しい者が機動六課の扉を叩く。

なのはS t S再構成S S「COMBINATION ATTACK
！！」序章「出会い、そして訓練」

はやて「選り抜かれた者たち、ようこそ機動六課へ、私は部隊長の
八神はやてや、よろしくたのむな」

なのは「始めまして、高町なのはです。主に皆の身の回りの世話を
してゆくの何か困ったことがあったら遠慮なく言ってね、よろし
くおねがいます、で、フェイトちゃんは？」

はやて「いまあと一人迎えに行ってる、じきに来るやろ」

なのは「そっか、じゃあ一足先に皆に自己紹介してもらおうかな。
出身とランクくらいでいいか」

ティアナ「では私から。私はティアナ・ランスター。ミッドチルダ
西部エルセア出身で、魔術ランクは陸戦C。銃撃を主体にしていま
す。これから一年間、よろしくおねがいます」

スバル「私はスバル」ナカジマ。ミッドチルダ西部エルセア出身の
魔術ランクはティアナと同じく陸戦Cです。近接戦闘を主体に戦っ
ています、よろしくおねがいます」

はやて「ん・・・スバル」ナカジマといえば・・・」

なのは「管理局では『二色の閃光』って通り名で有名じゃない？相
方はなんて名前だったっけ・・・」

スバル「リンク」ザ「フォンティナですね、彼は私の昔からの友人
です」

そうついた瞬間に、はやてとなのはは動きを止める。

ティアナ「・・・どうしました？」

はやて「・・・いやあ」

なのは「偶然ってほんとにあるんだなって」

ティアナとスバルは首をかしげる、そんな時だった。

フェイト「ただいま。連れてきたよ」

なのは「おかえり」。後ろにいる男の子がそうかな？」

スバルとティアナは男の子なんだ・・・と視線を動かす。

スバル・ティアナ「・・・え？」

リンク「・・・本日付で機動六課に配属されました、リンク「ザ」フォンティナです、よろしくおねがいしま・・・ってえ？スバル？ティアナ？」

スバル達がよく見知った顔が、そこにあった。

はやて「これはまあ・・・何たる偶然」

なのは「『二色の閃光』の二人がここで揃うとは予想外だね・・・」
リンク「『二色の閃光』・・・それって僕達のことですか？」

はやて「そうや、君たち、中々に管理局の中では有名もんやで？」

スバル・リンク「・・・知らなかった・・・」

はやて「なんや、自分達がそこまで強くないとおもつとるんか、二人でのコンビネーション攻撃は技術ランク的にAAオーバーやで？ティアナ「ええっ！凄いいじゃない、スバル！」

スバル「ええ・・・私はリンの言うこと聴いてるだけだよ・・・？」
リンク「気安くあだ名で呼ぶな・・・俺は場に合わせて攻撃プランを練ってるだけだ」

なのは「・・・あんな魔力弾が大量に飛び交う中で攻撃プランを練ってるの？」

リンク「回避だけには自信があるんで。自分は作戦を組み立ててスバルに実行してもらい、それに自分のタイミングを合わせているだけです」

なのは「タイミングって・・・「ああっ！！」ってどうしたの？はやてちゃん！？」

はやて「もしやあんた・・・『グッドタイミング』の名で知られる・

・あのリンクかあつ!？」

リンク「ええ・・・なんかそう呼ばれてるみたいですね、ていうか部隊長、僕を引き抜く際にそういう情報はなかったんですか？」

はやて「書類見ただけでビビッときたんでなあ・・・忘れてたわ」

リンク「はあ・・・じゃあ改めて自己紹介させていただきますね。

僕の名前はリンク「ザ」フォンティナ。仲間達からはリンの名称で呼ばれています。執務官学校「所属」だった者で、ミッドチルダ出身・・・詳しい場所は知りませんが・・・魔術ランクはB+、スバルと同じ近代ベルカ近接式です。よろしくおねがいします。」

なのは「・・・執務官学校所属だった者って？」

リンク「はやて部隊長に引き抜かれたときに、学校には一時退学兼留学しているという風に伝えてあるんです」

フェイト「・・・なぜはやて部隊長の引き抜きに応じたの？」

リンク「貴方の傍で仕事を見たいからです、フェイト執務官」

フェイト「・・・えっ？私？」

なのは「ああ・・・フェイトちゃんは執務官だからね・・・なるほど、いろいろと学びに来たんだね。ティアナも執務官志望だったっけ？」

ティアナ「ええ・・・そうですけど」

リンク「ティアナほど自分は技術がないんで、いろいろと教えてください」

ティアナ「・・・さりげなく嘘つくんじゃないわよ、どう考えてもあんたのほうが指揮技術は上じゃない」

リンク「団体は指揮したことがなくてね・・・僕はティアナの指示通りに動くからさ」

ティアナ「・・・私がリーダーなの？」

はやて「そうや、この機動六課フォワード陣は、あんたがまとめるんやで」

スバル・リンク「ティアナ、よろしく(な)！」

ティアナ「・・・ふう、わかりました、これからよろしく頼むわよ、

みんな」

リンク「・・・ところで、あそこで遊んでる子供3人は？」

フェイト「ああ・・・あれも貴方たちの仲間よ、おい、エリオ、キャロー、ティオー」

????「「「はい!」」」

子供3人がフェイトの声に反応しこっちにかけってくる。

リンク「・・・この子達は？」

フェイト「うーん・・・私の家族の3人かな、こっちの男の子がエリオ。この女の子がキャロ。最後の女の子がティオールっていうんだ」

エリオ「あなた方が今日から私たちのお兄ちゃん、お姉ちゃんになるのですか？」

リンク、スバルティアナともの噴出す。

スバル「どどど、どういうことですか!? フェイト執務官!」

はやて「これから同じ部隊で戦うんや、家族も同然やろ? べつにいいやないか、なあ、なのはちゃん？」

なのは「リンクくんは弟と妹が出来て満更でもない顔してるけどね」

ティアナ「・・・リンクってロリコンだったのか・・・」

リンク「違うわっ!・・・っと、君達が今日から家族になる子たちなんだね。よろしくおねがいます・・・かな？」

エリオ「・・・お兄ちゃんって呼んでも良いのですか？」

リンク「おお、呼べ呼べ、好きにしたら良い、だってお兄ちゃんになるんだから。ね? フェイト執務官？」

フェイト「・・・案外リンクが面倒見てくれそうで助かるわ。その子達、よろしくね」

リンク「ええ、任せてくださいな」

スバル「・・・リンクの適応力が凄い」

ティアナ「私たちじゃあんなこと出来ないよ・・・」
軽く凹む二人であった。

出会い、そして訓練 01（後書き）

とまあ、のんびり展開で進んでいきますよ。

次回はぼこぼこにされる模擬戦をやるうかと思っています。
ではでは。

出会い、そして訓練 02（前書き）

模擬戦まで行かなかった…（；。ん）
次こそは模擬戦編を・・・

出会い、そして訓練 02

なのはS t S再構成S S「COMBINATION ATTACK
！！」序章02

出会い、そして訓練

リンク「・・・ここは？」

なのは「訓練施設だよ？」

リンク「・・・どうみても全員が動き回れるスペースではないのですが」

なのは「ふふっ、みててね」

そういとなのはは手元にあるコンソールを叩いた、その瞬間。

スバル「・・・おおっ!？」

ティアナ「なにっ・・・これ・・・っ!？」

リンク「一瞬にしてビル群のステージに・・・!？」

なのは「ここは管理局の最先端技術を使って作った訓練施設だよ。

実態があるから触れるし、訓練にはもってこいだね」

フォワード陣は驚きで声が出せない。さらにそこにとどめが入った。

なのは「皆には今からここで、私一人を相手に模擬戦をしてもらいます」

顎が外れるぐらいにあんぐりするフォワード陣。

なんせ管理局のエース・オブ・エースと呼ばれる女性だ、勝てるわけがない。

なのは「今日は皆の腕を見るだけだから、攻撃は特にしないよ、皆で協力して私に一発入れたら今日は終わり。簡単でしょ？」

彼女が鉄壁のプロテクションを持っているのをフォワード陣は事前から知っている。全員でかかって勝てるかどうか・・・

リンク「・・・分かりました。やりましょう」

ティアナ「リンク!？やる気なの!？」

リンク「逃げてても仕方ないだろ、やれることやって情報取ってもらって最適な訓練をしてもらうのが最善だと思うけど？」

なのは「その通り、これで大体の皆の長所とか短所とか一気に掴ませて貰うから、全力全開で私に突っ込んできてっ！！」

「……はいつ！！」「……」

全員分の声が響く。そこでリンクは気づく。

リンク「そっぴやエリオ達の紹介を聞いてないな。仲間の力は知っておいたほうが良い、頼むよ」

エリオ「……あっはい！僕の名前はエリオ・モンディアルです。

陸戦Bランクの近代ベルカ近接式です」

キャロ「ええと……私の名前はキャロ・ル・ルシエです。陸戦C＋ランクの竜召還士です、この子が私の友達、フリードです」

フリード「きゅくるー」

竜召還士が、珍しいなと思いつながらリンクは最後の少女に目を向ける。

ティオール「私の名前はティオール＝ランドルク！空戦B－ランクの近代ミッドチルダ式だよっ気軽にティオって呼んでねっ。りんにい！！」

リンク「りんにいっ……！？まあいいか、これからよろしく頼むよ」

「……はいつ！！」「……」

なのは「まだみんな自分専用のデバイス持っていないよね？スバルのリボルバーナックルはともかく、リンクのは支給されたデバイス？」

リンク「ええ、学校から支給された奴です。メンテナンスでも？」

なのは「いいえ、今回の結果から皆に合ったインテリジェントデバイスを作ろうと思うの。これから皆は前線で戦うのに一人じゃ辛いから、人工知能をもったデバイスで補おうと思って」

全員の顔が晴れる。

スバル「皆のを作ってもらえるんですかっ！？」

なのは「ええ、前線で戦ってもらえる貴方たちになら、開発費のち

よつとやそつとは動かせるよ。皆も、どんなデバイスにしようか考えておいてね」

「………はいっ！」「………」

なのは「じゃあ模擬戦を始めようか。みんなバリアジャケットをまとつて！」

それを合図に、皆の服装が変わり、それぞれのストレージデバイスが構築される。

リンク「スバルと俺はお揃いなんだよね」

スバル「おそろっ……！？こんな時に何言っのさリンっ！？」

なぜかスバルは顔を赤くしている。なんでだろうか？

ティアナ「昔からリンクの鈍感な感じは凄いわね……」

リンク「ん、何か言ったか？」

ティアナ「貴方が馬鹿と言ったのよ」

リンク「おい」

なのは「ほらほらみんなっつ、配置について！」

ひとまず僕らは所定の位置につく。

エリオは槍、キャロは手袋、ティアナは杖らしい。

リンク「槍か……男のロマンだな……」

なのは「じゃあいつくよっつ！模擬戦、スタートっ！！」

そして俺らは、同時になのはさんに向かって突撃していく――

出会い、そして訓練 02 (後書き)

短い短い。

次は長くなる予定です。

ではでは。

出会い、そして訓練 03（前書き）

模擬戦編。リンクとスバルが良い感じに決めています（え

出会い、そして訓練 03

なのはS t S再構成S S「COMBINATION ATTACK
！！」序章03

出会い、そして訓練

ティアナ「リンクはスバルと一緒にウイングロードで突撃！！進路は任せるわ。エリオ！キャロ！ティオ！貴方たちは私と一緒にリンクとスバルの援護！『二色の閃光』の実力、見せてもらいなさい！！！！」

「はいつ！！！！」

なのは「さて・・・コンビネーション、見せてもらうよっ！！」

そっぴいながらなのはは、一気に30機ほどのアクセルシューターを出す。

リンク「攻撃しないって言ってなかったけ・・・まあいいや、スバル！放物線上にロードよろしく！！」

スバル「了解！！」

ズドンッ！！とスバルがその場で地面を叩くと水色の魔法で作られた道がなのはに向かつて伸び始める。

リンク「いくぞ！スバル！」

スバル「おりゃああっ！！」

リンクとスバルはウイングロードを二人で並走してなのはに怒涛のスピードで突撃していく。

なのは「はやいつ・・・！！でもまだまだ！！」

なのはは10機ほどのアクセルシューターをリンクたちに放つ。

しかしリンクはその攻撃を読んで、スバルに作戦を開始させる。リンク「行くぞスバル！！作戦ナンバー003、フォーメーション

ォー！！！！」

スバル「了解っ！！そおれえっ！！」

突如リンク達が乗っていたウイングロードが裂け、リンクが乗っていたロードはリンクを上へ跳ね除けるような動きに、スバルのほうは下のほうへ伸び、さらにスバルを加速させる。なのはが放ったアクセルシューターは何もない空間を過ぎていく。

なのは「なっ!?!」

リンクがロードから離れ放物線上になのはに襲い掛かる。

リンク「うおおおおっ!!!」

なのは「くっ……」

なのはは20機残っていたアクセルシューターをリンクに向かって放ち、プロテクションで身を固める。リンクは一気に打ち出されたアクセルシューターをもっともせず、こちらに突っ込んでくる。

なのは「これだけの数の魔力弾をみて動揺しないなんて……さすがリン「今だっ!!スバル!!」……えっ!?!」

なのはが振り返ると、リングと同じように放物線を描きながら飛んでくるスバルの姿があった。

なのは「はやいっ……レイジングハート!防御よろしく!」

レイジングハート(了解です、マスター)

アクセルシューターを破ったリンクと、不意を付いて後ろから殴りかかった二人のナツクルが、なのはのプロテクションに突き刺さる。

エリオ「……二人とも凄い……」

キャロ「息がすごい合ってる……」

ティオ「りんにかっこいい!がんばれっ!」

ティアナ「あいつらのコンビネーションには付いていけないわ……まったく……」

エリオ・キャロ・ティオは憧れの目、ティアナは呆れ半分の苦笑いを浮かべた。

なのは(なかなかやるね、レイジングハート)
レイジングハート(でも、マスターには敵いません)

なのは（ええ？私これでもかなり限界だよ？）

レイジングハート（今の貴方にはリミッターが付いてますから。付いてなかったら先ほどのアクセルシューターも外さなかったでしょう？）

なのは（あはは・・・さて、レイジングハート、どうする？）

レイジングハート（防御は私がやりますので、ご自由に）

なのは（うん、ありがと。レイジングハート）

リンク「うおおっ・・・かつてえええっ！！」

スバル「おりやあああっ！！全然砕けないよっ！！」

周りは煙に巻かれて見えないうちに、そんな時にリンクは一瞬だが、プロテクション内から大きな光を見た。

リンク（あれは・・・まさかっ！？）

思い当たる節を見つけるとスバルに向かって叫んだ。

リンク「一旦引くぞ！！なんかやばい！！」

なのは「御名答」

スバル「・・・うおおっ！？何あれっ！！」

なのはの持つレイジングハートの先端は既に砲撃モードに入っており既に砲撃魔法の準備が整っていた。

なのは「身に痛みを知っているのも訓練だから」

リンク「・・・ティアナ、エリオ、キャロ、ティオ！援護を！！」

「・・・はいつ！！」「・・・」

既にリンクとスバルが作った5層プロテクションの上にさらに5層のプロテクションがかかる。

なのは「そんなもので防げると思ってるの？」

リンク「え・・・」

既になのはの魔方阵は完成しており、腕を振り下ろせば放てるという状態だ。回避は不可能。

なのは「じゃあ受け止めてね！！私の全力全開！！アクセル・・・デバイン・・・バスターーーッ！！！！」

なのはの前面からアクセルシューターをまとったデイベインバスターがリンクたちの張ったプロテクションに激突する。

ティアナ・エリオ・キャロ・ティオ「うぐぐぐうう・・・」

ティアナ達が張ったプロテクションが1枚・・・2枚と徐々に破壊されていく。

そしてリンクたちが張ったプロテクションに差し掛かった。

リンク「うおお・・・！！なんつー威力・・・！！」

スバル「このままじゃ防ぎ切れないよ・・・どうしようっ！！」

リンク「・・・スバル、ウイングロード出せるか？」

スバル「・・・何する気？」

リンク「最後のプロテクションが割れた瞬間に俺とお前でウイングロードを使用したパンチを叩き込む」

スバル「・・・危険な賭けだねそれ・・・」

リンク「でも、やってみなきゃわかんねえだろ？（にやつ）」

スバル「・・・リンのにやにや顔気持ち悪い」

リンク「ひでえなあ・・・で、やってみるか？」

スバル「ええ・・・いくよっ！！」

ウイングロードが砲撃の下をなのはの方向へ走っていく。砲撃中のなのはも戸惑いを隠せない。

なのは「・・・何する気なんだろ・・・レイジングハート！！出力UP！！」

レイジングハート「a l l l i g h t m y m a s t e r」

さらに砲撃の威力が上がる。2個プロテクションが吹っ飛んだ。残り1つ。

リンク「せーのでいくぞ！スバル！！」

スバル「準備OKえ！！」

リンク・スバル「せえーのっ！！」

パリン。最後のプロテクションが割れる。桜色の壁が迫ってきているというのに2人は怖さを感じなかった。

・・・ズドンッ！！

二人の小さい拳が、大きな砲撃に突き刺さる。
小さいながらも、砲撃を押し返していく。

なのはは驚きを隠せない。

なのは「プロテクション無しで砲撃を防いでるのっ!? 無茶苦茶だよっ!!」

さらに出力がUPする。

リンク「うおおおおおっ!!」

スバル「うああああああっ!!」

既に二人の姿は見えない。しかし彼は聞いた。

リンク・スバル「今だ!! エリオ!!」

エリオ「...っ!! ソニックムーヴ!!」

エリオが槍型デバイスを構えて突進する。

なのは「なっ!?!」

なのはが気づく頃には遅かった。

プロテクションを起動するが一足エリオが早かった。

プロテクションに阻まれ槍形デバイスは動きを止めたが... なのはの腰に僅かながらエリオの槍が食い込んでいた――

なのは「まったく... なんてあんな無茶するかな、はあ」

なのははため息混じりに首を振った。

シャーリー「でも良い結果が取れましたよ」

なのは「でもさあ... 肝心のリンクとスバルが怪我しちゃねえ...」

シャーリー「怪我させるような攻撃をしたのはなのはさんですよ」

ニヤニヤ「」

なのは「...うー」

リンクとスバルは動けないのかボロボロのバリアジャケットのま
ま担架に乗せられて医療室に向かった。

運ばれてる最中、リンクはスバルに話しかけた。

リンク「俺ら、頑張ったな」

スバル「うん、頑張ったよ」

二人は運ばれながら、子供のような笑みを浮かべていた。

出会い、そして訓練 03（後書き）

以上、模擬戦編でした。

次回は皆のデバイスの話をしようと思います。
では。

繋がるデバイス（前書き）

機動六課フォワード陣の新デバイス起動。

スバル、リンクの今度に期待ですね、デバイス達も二人の關係に注目するみたいですw

繋がるデバイス

俺達が機動六課に配属されてから一週間が経った。

だんだん慣れてきた俺は、フォワード陣だけの時は自分の事を俺と呼ぶようになっていた。まったく適応力というものは恐ろしい。

そんなこんなで一週間。訓練と簡単な任務をこなしていた俺たちだが、どういうわけかフォワード陣が持っていたストレージデバイスが偶然にも同時に壊れてしまった。

なのはさんの話によると殆ど皆の新しいデバイスは出来ているらしく、今日から新しいデバイスで訓練をするので、皆を引き連れて開発室にまで来いという通信があった。

リンク「・・・と、俺は誰に説明してるんだ」

スバル「リンク？何をぶつぶつ言ってるの？もう着いたよ？」

リンク「っと」

気がつくとも既に開発室の前まで来ていた。

ティアナ「失礼します、機動六課フォワード部隊です」

なのは・シャーリー「いらっしやーい」

身近な机でお茶を飲んでる、なのはさんとシャーリーさんの姿があった。

なのは「全員来たね。ちょうど良く皆の新しいデバイスが完成したよ」

シャーリー「どうぞこちらへ」

なのはさんとシャーリーさんに連れられ、開発室の奥へと進んでいく。

リンク「これは・・・」

比較的大きな広間に、巨大な試験管のような容器が六角形の形で並

んでいた。

ティアナ「これが・・・私たちの新しいデバイス・・・」

なのは「皆の戦闘スタイルに合うように調整してあるからね。こないだの模擬戦を見る限り今までのデバイスと同じ形態のデバイスのほうが良いかなって思ったし」

スバル「・・・ナックル型のデバイスが二つあるよ?」

シャーリー「スバルとリンクのよ?良かったじゃないスバル、新しいデバイスでもリンクと一緒によ?(ニヤニヤ)」

スバル「・・・ふええ・・・ノノノ」

顔を真つ赤にさせるスバル。俺には理解できないが、何か恥ずかしいことでもあったのだろうか。

リンク「・・・ナックル型の俺たちは靴も新調ですか?」

シャーリー「ええ。というかその靴が貴方たちのデバイスの本体よ。それとナックルをあわせて一つのデバイスとも言った方が良いでしょうね」

なのは「・・・さて、皆、自分たちのデバイスの前に立って。そして自分達が考えた名前を呼んであげるのよ」

「「「「「はいっ」「」「」「」」」」

ティアナ「マスター認証、ティアナ・ランスター。デバイス名、クロスミラージュ・・・おいで」

クロスミラージュ（・・・貴方が新しいマスターですね。これからよろしく願います）

エリオ「マスター認証、エリオ・モンディアル。デバイス名、ストラーダ。よろしくね!」

ストラーダ（元気なマスターだな、よろしく頼む）

キャロ「マスター認証、キャロ・ル・ルシエ。デバイス名、ケリュ

ケイオン。よろしくだよ。ケリユケイオン」

ケリユケイオン（貴方は私が守ってみせましょう）

ティオ「マスター認証つ、ティオール」ランドルク！デバイス名、インフィニティ・ハート！よろしくつ、インフィちゃんっ！」「インフィニティハート（可愛いマスターですね、よろしくお願いします）います」

スバル「マスター認証。スバル」ナカジマ。デバイス名、リボルバーナックル及び、マツハキャリバー。よろしくだよ、マツハキャリバー。」

マツハキャリバー（貴方と最速を目指しましょう。よろしくお願いします）

リンク「最後は俺だな。マスター認証。リンク」ザ」フォンティナ。デバイス名、シリンダーナックル及び、ブラストキャリバー。よろしく頼むよ」

ブラストキャリバー（姉のマツハキャリバー共々、よろしくお願いします）

リンク「・・・なんだって？」

ブラストキャリバー（マツハキャリバーと私は姉妹です）

スバル「・・・えええっ！？」

なのは「姉妹関係の方が上手く合わせられるかなと思って」

シャーリー「コンビネーションが命な貴方たちにはぴったりね」

リンク「・・・はあ、まあいいや。スバル」

スバル「・・・ふえっ／＼、ななな・・・なに？」

リンク「これからもよろしく頼むよ、二人で最高のコンビネーション、作り上げようぜ（ニコッ）」

スバル「・・・／＼、よよ・・・よろしくお願い・・・しま・・・す・・・／＼」

スバルは俺と握手をしているが、顔を赤くして頭を下げている。熱でもあんのかなー。

ティアナ「・・・あいつの鈍感な酷いわね・・・いつスバルの気持ちに気づくやら・・・はあ・・・」

ティアナは深いため息をつき、自分のデバイス、クロスミラーージュを見る。

ティアナ（こんな仲間たちだけど、頑張って行こうね、クロスミラーージュ）

クロスミラーージュ（貴方の為ならなんなりと）

マツハキヤリバー・ブラストキヤリバー（今後の二人に期待ですね・・・♪）

意外と恋バナが好きなデバイス姉妹だった。

繋がるデバイス（後書き）

今回は新デバイスを使っての大規模模擬戦を書こうと思います。アニメ本編とは違いますがティアナの変わりにスバルに誤射をさせる予定。

次回からどんどんスバルとリンクの仲を縮めて行きますよっつw

デバイス説明（前書き）

オリジナルキャラクターのデバイス説明。

デバイス説明

なのはS t S再構成S S「COMBINATION ATTACK
! !」一章01・5

デバイス説明

シリンダーナックル& a m p ; プラストキャリバー

リンク用に調整されたナックル型インテリジェントデバイス。

同時に製作されたスバルのリボルバーナックル改良型& a m p ; マ
ツハキャリバーとは姉妹機に当たる。本作ではデバイスの繋がりが
強いとコンビネーションが上手くなると強引に設定
↑

ベルカ式カートリッジシステム搭載。

魔力光は明るめの紅。リンクが名づけた『プラスト』の名はここか
ら来ている。

主に使用可能な魔法

ウイングロード

スバルと同じ、しかしスバルのは水色の道に対し、こちらは紅色の
道を形成する。色に違いがあるだけで、能力等はスバルのと大差は
無い。

ジェットパンツァー

スバルのナックルダスターと同系統に当たる。

威力はスバルのそれを優に超えている、使用者がリンクという力の
ある男性だからか。

シリンドーナツクルにはヴィータのグラーフアイゼンのようにジェット機能が付いており、カートリッジを使用することで威力が数倍にも膨れ上がる。しかし使用者のリンクの魔力はヴィータほど多くないため、シリンドーナツクル側で魔力の維持等を行っている。

シリンドーショット

拳の前に魔力弾を形成し、殴って相手に飛ばす直線砲撃魔法。殴る強さによって飛んでいく速度が違う。

後にこの技がリンクの必殺技の原案になっていく。

インフィニティハート

ティオールが持つことになったインテリジェントデバイス。

人格はお姉さんタイプ。

モデルはなのはのレイジングハート。レイジングハートより砲撃能力に劣り、思念制御や援護魔法を駆使する能力に勝る。

ミッドチルダ式のティオールのデバイスだが、リミッター付きのベール式カートリッジシステムが付いている。いざという時は親に当たるフェイトなどの使用許可が出る。

主に使える魔法

コントロールシューター

なのはのシューターは数多くを制御して相手を翻弄するが、ティオールのシューターは身の丈を優に超える巨大なシューターを単発で

出し、相手を遠距離から追い詰めるタイプだ。

そのシューターが爆散した時の威力は申し分なく、なのはのディバインバスター並みの威力に当たる。

ロングサーチ

かなりの広域をサーチ出来る魔法、しかし使用中は動けない。

パワーケース

広域克強力な結界を張ることが出来る。なのはのアクセルシューターでは太刀打ちできないほどの強度を誇る。これも、使用している間は動けない。

デバイス説明（後書き）

色々と仕様が変わるかも（；、）

大規模模擬戦、焦る思いと近づく想い 01（前書き）

お待たせしました。大規模模擬戦編スタートです。

この話は長くなりそうなので、暖かい目で見守っていただけると幸いです。

なのは「じゃあ、新しくなったデバイスで訓練しようか！」

「……………はいっ！！」「……………」

なのは「てことで、フェイトちゃんと私対フォワード陣大規模模擬戦、始めるよ！」

「……………ええっ！？」「……………」

なのは「えっ……？何でフェイトちゃんも驚いてるの……？」
呼び出されていたフェイトは焦りながらなのはに答える。

フェイト「だ……だって皆は新しいデバイスを会ったばかりだよ・
・？そんないきなり私たち相手に模擬戦だなんて……」

なのは「ちまちま訓練するより、新しいパートナーと思いつきり戦
ってみる方が大きい成果が出る気がするんだっ」

リンク達はなのはの言い分に苦笑する。

リンク「良いですね、やりましょう。僕のブラストキャリバーも戦
いたくてうずうずしてるみたいですし……皆もやってみたいよな
？」

スバル「新しいデバイスと最初っから思いつきりやるのか……楽
しそうつー！！」

ティアナ「どんな子達なのかも分かるしね、ね？クロスミラージュ」
クロスミラージュ（私は模擬戦練習に賛成させてもらいます）

テリオ「インフィと一緒に頑張るもんっ！」

インフィニティハート（一緒に頑張らしましょうねっ）

次々と模擬戦賛成の声が上がっていく。戸惑ってるのはフェイトだ
けだ。

フエイト「ええっ・・・しょうがないなあ・・・じゃあ私も参加するよ。エリオとキャラ、ティオが強くなってるのか見たいし」

なのは「じゃあルールはこうだね。基本的に一対三の戦いで、フエイト対エリオ、キャラ、ティオ。私対リンク、スバル、ティアナって所かな。この間は一発入れれば勝ちってことになってたけど、今回は本気の勝負！フエイトと私が撃墜されるか、フォワード陣が全滅するか勝負にするね！！」

リンク「それで行こうか、スバル、ティアナ、よろしくな」

スバル・ティアナ「よろしく（ねっ！）（頼むわよっ！）」

フエイト「私の相手は子供たちかぁ・・・よろしくね」

「お母さんよろしくーっ！！」「」

フエイト「・・・ちよつとやりずらいかも・・・」

フエイトはため息交じりの苦笑いをした。

なのは「今回は荒野でやりましょうか、ステージセット・・・つと一瞬にして訓練施設が風が巻き起こる荒野に景色を変える。

エリオ達は既に遠くにいるらしく、ここには四人しかいなかった。

なのは「さて・・・新しいデバイスでの初めての戦いだね。セットアップよろしくー！！」

リンク「ブラストキャリバー、Setup!!」

ブラストキャリバー（Stand by ready, OK, Setup.）

リンクが紅の光に包まれる。

スバル「うわっ・・・眩しい・・・」

ティアナ「何・・・この魔力量・・・」

なのは「リンクはずっと支給されたデバイスを使ってたからね、リ

リンク専用で作られた新しいデバイスだからでこそ、出せるものも出せるようになるんだ。・・・というか、この魔力量・・・並みの魔導士達を軽く超えてるね・・・今までの魔力で私のプロテクションを破りかけるんじゃない、この魔力量なら私の今のプロテクションを破れるかも」

リンク「・・・っと、バリアジャケット装備。・・・なんか凄いデザインだな」

リンクの体には、動きやすい簡略化されたライダースーツの物のほかに、足のかかとに届きそうなくらいの大きなマントが付けられていた。

スバル「・・・かつこいいよ、リンク」

リンク「・・・突然何を言い出すスバル」

ティアナ「へえ・・・ナツクルも足回りも凄く良い出来ね」

リンク「重過ぎないナツクル、軽量な足回り・・・さすがシャーリーさん、良いものを作ってくれました」

なのは「そういつてくれると嬉しいな。シャーリーにも喜んでたよって伝えとくね」

リンク「ありがとうございます」

スバル、ティアナも装備を済ませ、模擬戦開始のスタート位置に付く。

なのは「さて・・・どこまで自分のパートナー達と心を交わせるか、試させてもらおうよっ！！Ready.....Start!!!!!!」

そして管理局のエース・オブ・エースとフォワード陣三人組の模擬戦の火蓋が、切って落とされた。

フェイト「・・・なのはたちは始めたみたいだね。私たちもやるよ。バリアジャケットよろしくね」

「『はいつ！』」

ティオ「インフィニティハートツ！！セエーツト、アアアップツ！
！」

ティオの姿が変わっていき、右手に身の丈を超える大きな杖が構築される。

ティオ「インフィ、おっきいねっ」

インフィニティハート（持ちづらいですか？）

ティオ「うんっ、インフィ軽くて扱いやすいよっ」

インフィニティハート（それは良かった。シャーリーに軽量化を施しておくように頼んであったのです）

ティオ「えへへっ、ありがとインフィッ」

エリオ、キャラもバリアジャケットを装備する。

フェイト「さて・・・あまり怪我はして欲しくないからこっちはちよっと手加減するけど・・・エリオ達は構わずに攻撃してきてね」

「『はいつ』」

フェイト「じゃあ・・・どれだけ強くなったか見せて貰うよ・・・

Ready.....Start！！！」

そしてフェイト達の模擬戦も、始まっていく――

大規模模擬戦、焦る思いと近づく想い 01（後書き）

てことではV S トリオコンビ、フェイトV S 子供達がスタートします。

最初はフェイトの方から書いていきます。なのはの方でトラブルを起こす予定です（ネタバレですが）

サブタイトル、「大規模模擬戦、焦る思いと近づく想い」ですが。このサブタイトル系列でスバルとリンクの仲を一気に縮める気です。ティアナがどんどん居心地悪くなりそうなので、何か解決策をひねり出さないと・・・

ではでは、次回からバトル成分増し増しで行きます。よろしくお願いします。

大規模模擬戦、焦る思いと近づく想い 02（前書き）

長らくお待ちいたしましたーっ！！

主がデザイン科の課題に追われたりバイトが連日で入ったり疲れてぶっ倒れたり…とにかく更新する暇がありませんでした。

お詫び申し上げますっ！！

大規模模擬戦フェイトVS子供達、始まります。

大規模模擬戦、焦る思いと近づく想い 02

なのはStS再構成SS「COMBINATION ATTACK
!!」一章03

大規模模擬戦、焦る思いと繋がる思い

フェイトside

ティオ「キャロツ!! 転移っ!! 多分結構高いところまで!!」

キャロ「了解ですっ」

ティオが何処かは分からないが転移されていく。

フェイト「…何処に転移したんだろうか。まあ大規模なサポート魔法を発動させる為に転移させたとは思えな…っ!？」

突然にフェイトの身体に重力が重く押し掛かる。

フェイト「…なにこれ…身体が重い…っ!？」

フェイトside end

エリオside

エリオ「…ティオさんの魔法が発動したみたいですね」

フェイト「…こんな魔法喰らったことないんだけど」

ティオがわざわざ全体念話で話す。

ティオ「この間覚えてたんだっ。グラビティバインドっていう魔法なんだけどなあ…本来なら敵を押しつぶしてしまえるんだけどまだまだ出力不足…」

フェイト「ティオならもつと強い魔法が出せるようになるよ」ニコッ
ティオ「…えへへっ。そうか「隙有りっ」…ええっ!?! エリオ君危

ないっ)

エリオ「えっ」

とんっ。

エリオの意識はそこで途絶えた。

エリオ side end

キャラ side

なんかフェイトお母さんが凄く速さでエリオくんに接近して一撃でエリオ君を気絶させてしまいました…。

キャラ、絶賛困惑中。

フェイト「うーん…いつもより速度は出ないなあ…」

キャラ（あれでグラビティバインドが効いてる状態なのっ！？ティオ！？）

ティオ（うーん…フェイトお母さん、恐るべし…。どうしようか、

キャラ、私のところに転移できる？）

キャラ（うんっ。わかったっ）

フェイト「さて…あとはキャラ…「作戦タイムッ！…ごめんフェイトお母さんっ！…」…えっ」

しゅんっ。

キャラ side end

フェイト side

キャラの姿が消える。転移魔法を使ったようだ。ご丁寧に何処に飛んだか分からないように使ったみたい。

フェイト「中々転移魔法だけはうまいじゃない…何処に行ったのかしら…」

そんな風に考えていると体の重みが消えた。

フェイト「…グラビティバインドは解除されたみたいだね。援護組二人で何処までできるのか…見させて貰…」

そんな時だった。

シュー…

フェイト（…何か飛んできてる？）

フェイトは振り向いて後ろを見る。

フェイトの身長を優に超える球体のシューターが迫ってきていた。

フェイト「なにあれっ!？」

フェイトは回避行動を開始する。が思念誘導されているのか避けても避けても追いかけてくる。

フェイト（…バルディッシュ。プロテクションを）

バルディッシュ「Yes sir。」

フェイトの腕にミッドチルダ式の円形防御壁が出現する。

そのプロテクションに巨大なシューターがぶち当たる。

フェイト「…なんていう威力…っ」

フェイトはプロテクションで防御しながら、バルディッシュを使ってシューターの威力を物理的に削っていく。

そして、なのはの使うシューター並みに小さくなったシューターをみて、フェイトは止めを刺そうとバルディッシュを大きく振り上げて…振り下ろした。

シューターは真っ二つにわれ、降下を始めた。

フェイト「テイオも中々に強い魔法をもって…」

その時だった。

ぴしっ。

真っ二つに割れて降下を始めていたシューターに、罅が入り中から激しい光があふれ出す。

フェイト（…!?!まさか…爆発!?!）

フェイトのプロテクションが発動させるにはあまりにも短い時間だ

った。

シューターの罅は広がり中から光の本流が溢れ、そして。

爆散。

防御無しにまともになのはのディバインバスター並みの攻撃を喰らったフェイトは軽々と吹っ飛んだ。

フェイト（いったあゝっ…あそこまで削ってあの威力…周りは只の拡散した魔力だったってこと…？）

フェイト「とにかく…あんな攻撃また喰らうわけには…」

フェイトが立ち上がる、そんな時だった。

びーびーびー。

フェイト「…緊急通信っ！？ティオ！キャロ！一旦模擬戦中止！戻ってきなさいっ！！エリオも起きてっ！！」

新たな任務を告げる通信だった。

大規模模擬戦、焦る思いと近づく想い 02（後書き）

てことで模擬戦最中なのに緊急通信が入ってしまいました。
もっと書きたいのに…

次はなのはV S トリオコンビ編。ココは長く書きたい!! 投稿が遅くなる。

待っていただければ幸いです。

では。

大規模模擬戦、焦る思いと近づく想い 03（前書き）

案外短く出来てしまった…文才が無いって悲しすぎる。
なのはVSトリオコンビ、始まります。

大規模模擬戦、焦る思いと近づく想い 03

なのはStS再構成SS「COMBINATION ATTACK
!!」一章04

大規模模擬戦、焦る思いと近づく想い

なのはside

なのは（この間の模擬戦ではギリギリ負けたけど、今回は負けないように頑張ろうね、レイジングハート）

レイジングハート（マスターとなら出来ます。ところで、リンク達の新デバイスですが、力は未知数です、注意しましょう）

なのは（ありがと、レイジングハート、じゃあ、始めよっかつ!!）

なのはside end

リンクside

リンク「ティアナ！援護射撃を頼む!!」「分かったわ!!」「スバル！俺と突撃!!」「了解!!」…さて、よろしく頼むぞ！プラスチックヤリバー!!」「all right!!」…ナンバー002、フォーメーション『?!!』、行くぞ、スバル!!」

スバル「ウイングロードは？」

リンク「俺も出せるようになった！行くぞ!!」

スバル「了解！いっくよっつ!!」

ドンッ!!

以前の模擬戦で使ったような、縦のウイングロードではなく、左右両方からスバルの水色のウイングロード、リンクの明るい紅色のウ

イングロードがなのはに向かって伸びていく。

スバル・リンク「おおおおおっ！！」

爆発的な加速、以前の速度を大幅に凌駕していた。一瞬にしてなのはそばに到達する。

スバル・リンク「てえええいつ！！」

スバルとリンクは真正面からなのはに殴りかかる。

なのは「レイジングハート、プロテクション！」

レイジングハート「all right my master」

前回と同じようなのはは二人の攻撃を受け止める。

なのは「・・・っ！以前より強い！レイジングハート！受け流すよ！」

レイジングハート「Accel Shooter」

二人のナックルの真横にプロテクションの内側から放たれたアクセルシューターが突き刺さる。

目標を逸らされた二人は踏鞴を踏んで一瞬ながら隙を作ってしまう。

なのは「ボディがから空きだよ」

なのはが二人の身体に砲撃を打ち込もうとする。

ティアナ「させないわっ！！」

ティアナのクロスミラージュが火を噴きなのはを牽制、双方距離をとる。

動き出したのはなのはだった。

なのは「デイベイン…バスターーっ！！」

ありえないほどの詠唱速度で大規模な砲撃魔法を放つ。

ピンクの直線砲が三人に迫る。動いたのはリンクだった。

リンク「ロードプロテクション！！」

ブラストキャリバー「all right」

リンクが目にも留まらぬスピードで地面を叩き。ウイングロードを出現させる、しかし、回避用に出したわけではない。

リンクの出したウイングロードは地面をのたうち、波型の多重壁を完成させる。

ウイングロードの先端になのはのディバインバスターがぶち当たる。ウイングロードはばねの力を利用し、上手く横へディバインバスターを受け流した。

なのは・スバル・ティアナ「…あんな使い方があったなんて聴いてない（よ！）（わ！）」

リンク「飛行機並みに早い人間が走るんだぜ？そのくらいの強度があるって事だろ…」

スバル「私もやりたい！」

リンク「後で教えてやる。模擬戦を続けるぞ！！次！スバル！俺はお前に合わせる！」

スバル「了解！ウイングロード！！」

スバルの足元から新たなウイングロードが現れる。なのはまでのきよりは約150メートル。一直線にウイングロードが伸び始める。

爆音を立てながらスバルはなのはに向かって突撃する、残り130メートル。

なのは「レイジングハート！！お願い！！」

レイジングハート「all right」

なのは「アクセル！！シュート！！」

なのはから約50発のアクセルシューターが打ち出される。残り100メートル。

スバル「…っ！ティアナ！よろしく！」

ティアナ「りょーかい！」

ティアナのクロスミラージュから雨の様に弾丸が打ち出され、大半のアクセルシューターが打ち落とされるが、残りいくつかのシューターがスバルに迫る。残り50メートル。

スバル「くっ…」

スバルは回避のために失速しようとする。

リンク「避けなくて良い！俺がやる！うおおっ！！」

ウイングロードで後から追いついてきたリンクがスバルの眼前に迫っていたシューターをパンチで根こそぎ打ち落とし、並走する。残

り30メートル。

リンク「行くぞ！スバル」

スバル「うんっ！」

なのはに弾丸の様に突撃する二人。異変が起きたのはその時だった。
マツハキヤリバー「State-of-emergency
generating!（緊急事態発生）」

スバル「っ！？何！？」

マツハキヤリバーが警告を発すると共に、マツハキヤリバーの駆動
が止まり、スバルのウイングロードが突如消えてしまう。

スバル「つきやあああああああつっ！！」

荒野の地面は硬いゆえに、空中200メートルほどから生身で落ち
たらひとたまりも無い。

リンク・なのは・ティアナ「スバルッ！！」

リンクは最小限の旋回で手をスバルに向かって伸ばす。

リンク（…だめだっ！！届かねえっ！！かくなるうえは…！！）

なのは「…！？リンク！！何する気なの！！止まって…！！」

リンク「スバルが危ねえんだ！何としても助け出す！！俺が怪我し
てもだ…！！」

ティアナ「リンクッ…！！」

リンクがウイングロードを使い急降下を始める。ウイングロードが
行き着く先は…地面。

リンク「スバルウウウウッ…！！」

スバルが地面に叩きつけられる直前にリンクは高速でスバルの下に
回りこむ。そして。

ズドンッ…！！（ビキビキッ）

リンク「うぐあっ…！！」

スバルはリンクによって受け止められたが、リンクは物凄い勢いで
地面に叩きつけられた。

なのは・ティアナ「リンクッ…！！」

リンク「…！！」

なのは「気を失ってる！！ティアナ！！急いで救護班を！！……って
何！？こんな時に通信……っ！？緊急通信！？」

リンクside end

???side

???「さあ……！！物語の始まりだよ！！あっはっは……！！」

こうして、ファーストアラートは鳴り響く。

大規模模擬戦、焦る思いと近づく想い 03（後書き）

リンクが怪我しちゃいました。

そしてスカリエッティ一味が動き始めます。

ここでアニメの列車レリック回収に持って行く予定。

次の更新は未定。忙しい忙しい。

では。

ファーストアラート、焦る思いと繋がる思い 01（前書き）

ホントすみません。修学旅行だったりなんだりでまた長く期間を空けてしまいました。

ファーストアラート編、スタートです。

ファーストアラート、焦る思いと繋がる思い 01

なのはS t S再構成S S「COMBINATION ATTACK
！！」2章01

ファーストアラート、焦る思いと繋がる思い

問題の現場に向かう機動隊ヘリの中で、スバルは俯いて自分を痛めつけていた。

スバル（——のせいだ、わた…のせいだ…私のせいだ——！！）
スバルは、何度も座っているソファを叩く。

なのは「スバル…貴方のせいじゃないわ、マツハキヤリバーが貴方の魔力に対応できなかっただけじゃない」

スバル「でもっ…！！そのせいでリンクがっ…！！」

ティアナ「あいつはスバルを守るために行動したのよ？貴方がそんなでどうするのよ」

マツハキヤリバー（私の不可抗力です、気にしないで下さい、マスタ―）

スバル「わかんないよ…なんでリンクが怪我しなきゃいけないのよ…なんでリンクが怪我するだけでこんなに胸が苦しいの…？」

なのは「スバル…」

なのはとティアナ、マツハキヤリバーはスバルがどんな気持ちなのか、分かったような気がした。

きつと、スバルとリンクはずっと昔からお互いのことが好きなのだ。近すぎた故に、その気持ちに気がついていない、スバルも、おそらくリンクも。

だから、リンクは愛する人を傷つけないが故にスバルを怪我しなくても救い、スバルはスバルで、愛する人が傷ついてしまったこと

が物凄く痛いのであろう。

皆が空気を重くしていた時、あるものが口を開いた。

ブラストキャリバー（スバルは悪くありません。それに、マツハ姉さんも）

スバル「えっ…？」

ブラストキャリバー（マイマスターは、実は怪我をしないで済んだのです、スバルを地上スレスレでキャッチして、再びウイングロードで舞い上がることも出来たはずでした。ですが、マスターはそれをしなかった。それが何でか分かりますか？スバル）

スバル「…どうして…？」

ブラストキャリバー（貴方の身体に負担をかけない為です、スバル。貴方はあの時生身の人間でした。もしあの角度で急旋回していたら、風圧や気圧で貴方の節々の骨が折れかねません、マスターは、それを考慮してわざと地面にぶつかったのです、勿論、貴方をかばいながら）

この事実には誰もが驚いた。自分が怪我をしなくて済む道があったのにそれを捨ててまでもスバルに怪我をさせない為に動いたのだ。

ブラストキャリバー（そして、マイマスターは気を失う寸前、声には出せなかったものの、私に一つメッセージを残しました。スバル、貴方に『気にするな』と言っておけとの事ですよ？それでもまだよくよしていられますか？スバル？）

スバル「リンク…私は…」

操縦士「高町教導官！！問題の列車が見えました！！」

ヘリの先にはありえない速度で走る列車が見えてきた。

なのは「あの中にレリックがあるわ！！今回の任務はその回収！！そして、敵対勢力、ガジェットドローンの殲滅！！…あれはっ！

？」

操縦士「このヘリに多数の飛行型ガジェット接近中！！迎撃準備を
！！」

フェイト「OK！！なのはと私で迎撃するよ！！フォワード陣は後
で列車に直接乗り込み、レリック回収及び地上型ガジェットの殲滅
！！OK！？」

「……………はいつ！！……………」

一人足りないフォワード陣が、元気良く返事をする。

なのは「まずは列車の上にいるガジェットを殲滅！その後に列車内
に乗り込んでレリックを回収するよ！！行くよ！！フェイトちゃん
！！」

フェイト「うんっ！！」

二人はすばやく変身し、ヘリから飛び降りていく。空戦魔導士であ
るからこそ、飛行型ガジェットの迎撃には向いているのだ。

ヘリの中には、フォワード陣が取り残された。

エリオ「…キャロ、緊張しているの？」

キャロ「…うん」

エリオ「一緒に頑張ろう？きっと上手くいくから」

キャロ「でも…怖い…」

ティオ「もーっ！！なんでそんな暗いのっ！？スバツとドカーンと
やっちゃいましょうよ！！ね！！エリオ、キャロ！！」

エリオ「…そうだね！！」

キャロ「…うん！いつもどおりにやればいいんだっ！怖くなんてな
いよ！！ありがと！ティオ！」

ティオ「やっとなる気出してくれた？一緒にがんばろっ！」

「…うんっ！！」

ティアナ「…スバル。行ける？」

スバル「…うん」

ティアナ「リンクは死んだわけじゃないわ。まずこの任務をさっさ

と終わらせて、リンクの看病すべきじゃない？」

スバル「…そうだね。早くリンクに逢いたい」

ティアナ「じゃあさっさと終わらせましょ！行くわよ！！」

「おうっ！！」

二人の拳が重なる。

操縦士「まもなく列車の上に到着します！！フォワード陣、準備を！！」

「……………はいつ！！」

ティオ「いつくよー！！」

ティアナ「皆手を！！」

「……………せーのっ！！」

フォワード陣はヘリから飛び降りる。ヘリに残されたのは待機状態のブラストキャリバー。

ブラストキャリバー（頑張ってくださいね、5人とも）

その時、ブラストキャリバーに通信が入った。

リンク（緊急任務中か？）

ブラストキャリバー（気がつきましたが、マスター。今回は5人で何とかするみたいですから、ゆっくりと休養を…（断る）…っな！？マスター！？）

リンク（俺は現場に行くぜ、ブラストキャリバー）

ブラストキャリバー（そんな…まだ身体が治ってないでしょう！！無理はするものではありません！！）

リンク（わりーな、ブラストキャリバー。まだ、俺はスバルを救いきれてねえんだ）

ブラストキャリバー（…どういことですか？マスター）

リンク（なんかいやな予感がするってこった。スバルが怪我するのは見てらんねー。てことで頼むよ。ブラストキャリバー）

ブラストキャリバー（…まったく。そろそろ自分の気持ちに気づいたらどうですかね？マスター？）

リンク（気持ち？何のことだ？）

ブラストキャリバー（…ダメですねこれは…。まあ、分かりました。操縦士やなのはさんには、こちらから話を付けておきましょう）

リンク（悪いな、ブラストキャリバー。わがままにつき合わせちゃって）

ブラストキャリバー（いやな予感がするのは私も一緒ですよ。マスター）

リンク（…ははっ）

ブラストキャリバー（…ふふっ）

リンク（お、笑うなんて珍しいじゃないか、デバイスなのに）
ブラストキャリバー（進化してるんでしょね、貴方に持たれてから）

リンク（これからも頼むぜ、ブラスト）

ブラストキャリバー（ええ、私からも頼みましょう。頼みます、姉とスバルを）

リンク（じゃあ向かうとしますか。テレポートは使えるか？）

ブラストキャリバー（座標はもう設定してあります。あとはマスターの魔力で扉を開くだけです）

リンク（了解。よし、行くぞ）

へり内にテレポートが開かれ、中からリンクが飛び出す。

ブラストキャリバー（…ぼろぼろじゃないですか）

ブラストキャリバーの言うとおり、リンクの身体の所々には、何十にも巻かれた包帯が見えた。

リンク「骨が折れなかったのが不思議なくらいだな。ちょっと痛むが平気さ」

操縦士「…えっ！？リンク殿！？」

リンク「わりーな。来ちゃった。なのはさんに通信つなげられるか？」

操縦士「…了解しました。高町教導官。リンクが通信所望です」

なのは（…えっ？リンク！？なんで此処に！？休んでないとダメじゃない！！）

リンク「すみませんがなのはさん。俺もこの作戦に参加させていたできます」

なのは（でも…っ！身体はまだ…！）

リンク「骨は折れてないので平気です。…それより、いやな予感があるんです。頼みます、なのはさん。俺に出させてください！」

なのは（…無理は禁物だよ、リンク。あまり本気出さないこと。あと帰ったら無断で病院を抜け出したことについて反省文30枚ね）

リンク「…了解です。有難う御座います。なのはさん」

なのは（…早くスバルのところに行ってあげて。スバルとティアナを頼んだよ！！）

リンク「言われるまでもなく！！行くぞ！！ブラストキャリバー！

！」

ブラストキャリバー「all right my master」

そしてリンクも、戦場へを降り立っていく。

ファーストアラート、焦る思いと繋がる思い 01（後書き）

怪我してるのにリンク復帰。早いよ!!

この話終わったらスバルとリンクのお惚気話を書きたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9420x/>

なのはStS再構成SS「COMBINATION ATTACK!!」

2011年11月24日12時55分発行